

# 多文化関係学会ニュースレター

第 12 号 2008 年 3 月



## ■目 次 ————— CONTENTS■

●2007 年（第 6 回）年次大会総括	
第6回年次大会報告 招聘講演	2
プレカンファランス・ワークショップ	3
パネルディスカッション	4
オープンフォーラム	4
特別セッション	5
石井米雄奨励賞選考結果について	6
地区研究会報告 北海道・東北—7 関東—8 関西—9 四国／九州	11
2007年度第1回・第2回理事会議事録	12
地区研究会案内	15
お知らせ	15
ウエブ管理委員会・学会誌編集委員会・事務局・2008年度年次大会運営委員会・編集後記	

### 多文化関係学会 第6回年次大会を終えて 大会委員長 松田陽子（兵庫県立大学）

「サステナブル（持続可能）な関係の構築に向けて」というテーマのもとに、去る 2007 年 10 月 27 日（土）、28（日）に兵庫県立大学神戸学園都市キャンパスを会場として、多文化関係学会第6回年次大会が開催されました。北海道から九州まで、全国の多数の会員、および海外会員、そして非会員の方々にもご参加いただき、盛会裡に会を終えることができました。また、大会前日の 26 日（金）には、プレカンファランス・ワークショップとして、NPO たかとりコミュニティセンターのご協力を得て、多文化を背景とする人々の視点を通して見た社会問題を考えるワークショップが行われ、これも全国から来られた参加者による熱のこもった討論が行われました。

研究発表は、「文化の関係性」をキーワードに、コミュニケーション、言語、心理、社会、地域研究、教育関係、企業関係など、幅広い分野から 23 件の発表が行われました。とりあげられた研究対象地域も日本以外に、中国、タイ、ベトナム、ドイツ、アメリカ、カナダ、ユーゴスラビア、オーストラリア等にわたり、そのアプローチも、教育実践に関わる問題や理論的解明、歴史的視点によるものや現代社会の問題、NPO の活動に関わるもの等、非常に多彩で、まさに多文化関係学の学際性を体現するものとなりました。どのセッションでも発表についての熱心な質疑があり、参加者とのやりとりの中で、発表者も新たな視点を得ることができたのではないかと思います。

企画プログラムについては別途報告が掲載されますが、盛りだくさんの充実したプログラムでありました。そのため、やはり議論の時間が不足するという状況であったことが残念でした。懇親会に移る前に、プレイベントとして恒例になってきた音楽の時間も持ちました。朴元氏による韓国の舞踊と

チャンゴ（朝鮮半島の打楽器）の演奏が披露され、和太鼓とも似て非なるチャンゴの勇壮な迫力とジャズにも通じるようなリズム感に、圧倒され魅了されました。まさに文化の関係性を体感する時間となりました。

会を重ねる毎に、徐々に多文化関係学のあり方やグローバル化の進展する現代社会におけるこの研究分野の重要性が、より明確になってきたのではないかと思います。ミクロな視点とマクロな視点を持ちつつ、国内問題、国際問題の両方を視野に入れ、タコ壺的にならない研究のあり方をめざすという学会の方向性も形づくられつつあるのではないかと思います。また、現実社会が直面する課題に取り組む研究に従事しておられる方が多いことも強く印象に残りました。

講師の方々、司会者、発表者、参加者の皆様、そして、大会の企画・運営にご尽力くださった多数の方々には厚く御礼申し上げます。また、今年の大会に参加できなかった皆様には、ぜひ来年の年次大会にはご参集いただき、共に学会のエネルギーをさらに高めていただければと願っております。

### 招 聘 講 演

#### 東アジアにおける多文化共生の時代へ

ーマルチサブジェクティビズム（多重主体主義）の視点からー

報告者：金 眞（流通科学大学）

招聘講演では、韓国の思想そして哲学に鋭い観点を持つことで知られ、「NHK ハングル講座」でもおなじみの小倉紀蔵氏を迎えた。

「386世代」の話題から話を始められた小倉氏によれば、韓国は1990年代から変わり始めたと言う。386世代とは、1990年代に30代で、1980年代に大学に通い、1960年代に生まれた世代を指す言葉で、1990年代に登場した386コンピュータに由来する。この世代は韓国の民主化運動の主体であり、この世代の人達が社会に出た頃（1990年代）から、韓国は変わり始めたのだそうだ。

韓国は1997年度の経済危機を乗り越え、98年には金大中政権の下、日本の文化を一部開放することをきっかけに、現在はほぼ全面的に開放されている。映画館ではもちろん、今やインターネットで日本の映画やドラマを見る時代になっている。今の若者は植民地に対する反日感情も少なくなり、日本の芸能人に熱狂するファンも多い。



さらに、日本ではここ数年、空前の「韓流」ブームが巻き起こり、またそれに反する「嫌韓流」まで登場した。しかし、小倉氏は韓流も嫌韓流も実は、韓国を知らないことで生じた現象であると言う。韓国について知らないために、ドラマなどで描かれた内容を“純粋”に信じて「韓流」が、また、韓国をよく知らないからこそ、裏で悪口を言うような形で「嫌韓流」はできたと言う。このような現象に韓国人が違和感を覚えるのも仕方がないだろう。

ところで、韓国の学会に参加してみると、よく喧嘩をしているような光景が見られると言う。しかし、学会が終わると一緒にご飯を食べに行くそうである。韓国では、個々の考えや立場が異なるのは当然のことで、自分の意見を述べることは当然のことであるという認識を共有しているからである。一方、日本では異なる意見を知らないままにしたり、場合によっては関係を断ち切ってしまうことが多い。しかし、異なる意見があるからこそ、新たな見解が生まれる可能性もあるのだと小倉氏は言う。

大事なことは互いに理解することであり、また、そのためには当事者が話し合わなければならない。日韓の歴史意識そして植民地時代に対する謝罪についても、共同体を作っていく上でポジティブに受け入れるように努力しなければならない。多重主体は、主体が多重であるために互いを知ることが極めて重要であると言う。

東アジアにおける多文化共生時代へ向けて、今、私たちにできることは何だろう。日本と韓国は、それぞれ良いものを持っている。また、学会に参加された皆さんは様々な国で、その国の言葉で、そしてその国の人達と接して得られた貴重なものを持っている。

「異なる意見があるからこそ新たな見解が生まれる可能性もある」。そういう意味でも多文化学会の今後の使命は大きいだろう。

お忙しい中、本学会でのご講演をつうじて、大きな示唆を与えていただいた小倉先生にお礼を申し上げます。ありがとうございました。감사합니다！

**プレカンファランス・ワークショップ**  
**ケーススタディによる多文化社会研究 ～多様なマイノリティの視点から～**  
**報告者：石井晴子（北海学園大学）**

10月26日（金）、第6回多文化関係学会年次大会前日に行われた吉富志津代氏（NPO 法人たかとりコミュニティセンター常務理事）を講師とするプレカンファランス・ワークショップは2部構成であった。

第1部では阪神・淡路大震災の被害の大きかった神戸市長田区で始まった「たかとりコミュニティセンター」の様々な取り組みが紹介された。この取り組みは、同地区約8万人の在日外国人のうち言葉の壁のある約3万人に対しても災害時においても公平に効果的な援助活動を行うために常に多くの外国語のボランティアが活躍し、また多言語の情報の提供を旨とすること、また災害時のみならず、FMわいわいなど多言語での情報発信を元にして、日常的な多文化共生の街づくりをめざすものである。このコミュニティ作りのために考えられた、多文化な子供たちが築く地域社会（ワールドキッズコミュニティ）、高齢者、障害者の暮らしの支援やアジア女性自立プロジェクト等、自尊感情の向上を基盤にした在日外国人コミュニティの自立支援等のお話を聞き、様々な実務者のご苦勞を垣間見た思いがする。第2部では、学校での問題、医療問題、研修生雇用問題など事例ごとの課題と解決に向けた取り組みについて、久保田真弓氏（関西大学）をコーディネーターとし、大城ロクサナ氏（ひょうごラテンコミュニティ代表）とハ・ティ・タン・ガ氏（NGOベトナム in Kobe 代表）をコメンテーターにお迎えした。教育分野では在日外国人の親としての葛藤、子供のための母語教室の不足、医療分野では通訳をいれることの難しさ、公衆衛生の情報の少なさ、雇用関連では研修生問題の実態の全貌がいかに知られていないかを再認識する貴重な経験となった。

「たかとりコミュニティセンター」の活動を力強く引っ張っていらした吉富氏らのオーラに日本の多文化共生社会の希望を見出したのは私だけではあるまい。「お上は助けてくれないのである、住民とはすべての人のことであり、多様性を重視した住民自治の意識の向上が大切である」という吉富氏の

言葉はどの地域にもあてはまることであるのだが、実現が難しいと思われるものである。日本の多文化共生推進プログラムが現実的な施策として実行されることができると見ることで勇気がわいた。

### パネルディスカッション 「文化の関係性をめぐるアイデンティティ再考」

報告者：清 ルミ（常葉学園大学）

松田陽子大会委員長のコーディネートのもと、龍谷大の李洙任教授、奈良教育大の渋谷真樹准教授、関西大の八島智子教授の3名のパネリストにより行われたパネルディスカッションの様子は以下の通りであった。

冒頭でNPO制作の「在日であることの意味」と題するビデオが上映された後、まず李氏がご自身のライフストーリーを語った。李氏は在日三世。職業差別、帰化障害などから渡米し、夫はイラン国籍、娘はアメリカ国籍という異国籍家族を持つ。その体験から国籍に捕らわれない文化空間のとらえ方、在日コリアンの現況、依然として変わらない日本社会の閉鎖性などについて述べた。次に渋谷氏は、スイスで育つ日本人の子どもを対象にカルチュラルスタディーズの視点から質的に聞き取り調査した結果を報告した。特に日本語学習に焦点をあて、教授者側の日本語教育の意味づけと子どもの受けとめ方を子どもの語りから浮かび上がらせ、言語とアイデンティティ形成の関係性について述べた。最後に八島氏は、言語の習得の観点から社会的アイデンティティ、民俗的アイデンティティ、流動的で変化するアイデンティティなどのアイデンティティ概念の潮流について述べ、文化継続性の維持・一体化を支え、変化・差異に開いていくための資源としての言語のもつ意味を明らかにした。

時間を効率良く使い、精力的かつ知的刺激に満ちた3氏の発表は、その後フロアとの活発な質疑応答を導いた。国際児、国際結婚という用語の「国際」の意味、ハイブリッドと複合の違いなどの用語の定義と解釈に関する応答に続き、二言語政策についての国内の現状、在日外国人に対する行政としての日本語教育の取り組みや異質な者に対する日本社会の変化の可能性の有無などについて議論が交わされた。松田氏という無駄のない有機的な橋渡しと取りまとめの達人を得て、2時間はあっという間に過ぎ、大変に有意義なパネルであった。

### オープンフォーラム 「食のせめぎ合いと多文化関係」

報告者：西浦 慎介（愛媛大学 農学部3年）

今回のオープンフォーラムでは、食および食文化における多文化関係のあり方をさまざまな角度から議論した。グローバル化が加速する現代において国際的な多文化共生関係の重要性は高まっており、文化面においてサステナブルな関係を構築することが急務であろう。フォーラムの目的は、多文化関係における食および食文化の位置づけをおこない、食文化多様性の必要性について議論を深めるということである。今回は、グローバル化により激しくなってきたさまざまな問題のうち、第1に、食および食文化を基本的にどう理解し、どう位置づければ良いのかという問題、第2に、捕鯨国と反捕鯨国の対立が久しく続いている捕鯨問題、第3に、日本食の普及にともなうマグロ資源の世界的争奪問題、等々の問題に焦点をあてて、以下3人のパネリストによって多角的に議論が展開された。

まず、はじめに桃山学院大学の岸本裕一教授は、「食はエンタテインメントだ」をキャッチフレーズに、ユニークなテーマで 21 世紀の「食」の位置づけをおこなった。現代において食を考えると、マズローやエンゲルなどの視座では不十分であり、食を基本とする衣食住の生活の質（QOL）が文化の水準を規定する尺度となるという内容であった。そして、国際的な文化関係の中で食をめぐる多文化共生・共存の糸口を探った。

次に、桜美林大学の高橋順一教授は、日本が直面している捕鯨におけるカルチュラル・ポリシーをとりあげた。捕鯨問題が世界でとりだされてから 20 年以上経過し、国際状況が大きく変化した。その間に捕鯨状況あるいは捕鯨の意味合いも変化した。それは捕鯨問題を文化問題として、位置づけなければならない状況をもたらした。高橋教授は、様変わりした日本の捕鯨状況を提示するとともに、鯨資源利用の文化的意味について述べた。

3 人目に、鈴鹿国際大学大学院の小林路義非常勤講師は、世界に広まった日本料理に伴う水産資源の問題や知的財産権の侵害などの多文化問題を指摘した。ここでは、グローバル化によって生まれた食のフュージョンをはじめ、マグロ・ウナギ・その他の水産資源を取り上げた。そして今後、日本はどうすべきかという点に関して、何よりも日本は外交を強化し、世界のリーダーシップをとることの必要性を指摘した。

最後に、コーディネーター役を務めた愛媛大学の細川隆雄教授は、多文化関係学会において、食および食文化について議論することの必要性、捕鯨問題における文化多様性の必要性を説き、フォーラムを締めくくった。

### 特別セッション 「多文化関係学を考える----石井米雄先生と共に----」

報告者：John Inglusrud（明星大学）

年次大会では初めての試みとして「特別セッション」が企画され、40 人近くが出席した。司会をされた小林登志生先生は、まず石井先生と企画した「ホラロジー」の会について紹介された。それは長時間をかけて自由に討論する会であるということだが、25 年間も京都大学にいらした石井先生は、しばしば他の研究者と共に集まり、深夜に至るまで討論した習慣があったそうで、このような集まりを東京でも作ろうとしたのである。しかし、東京の通勤範囲の広さ、また、気軽に討論しあう習慣が薄いことなどが原因で、なかなか困難であったようだ。とくに京都の集まりでは参加者が「分からないことは分からない」と自由に告白していたそうで、このような空気は、討論を進めるのに大事な要素だったようである。

また、京都と東京の文化の違いをはじめ、先生ご自身が体験されたカルチャーショックの数々も紹介された。例えば、東京下町の小学校に通っていた先生は、山の手にある麴町小学校との違いを幼いときから気づかされていたとのことだが、その後、7 年間におよぶタイでの生活、研究のためにたびたび訪れた東南アジア、また、イギリスやオーストラリアでの生活体験から、言語はまさに文化を媒介していると考えられるようになったそうである。

先生は、言語とはその話者の文化を伝える機能を持つものだから、夫々の国の言語は大事にしなければならないと主張された。また、ご自身の UNESCO との長い関わりや各国の言語・文化政策に詳しいことから、先生は、ヨーロッパ連合の例をあげられた。ここでは、英語のような共通言語は *working languages* として使われていると言い、*official languages* というのは、それぞ

れ加盟国の言語が指定されているという。実は、このような方法では、書類を翻訳するために大変な労力と財源が必要なのだが、政策としては、国の文化の維持・発展に成功しているそうである。

さらに、先生は、言語が文化を媒介していることについて、複数の例をあげられた。例えば、英語と日本語の名前の呼び方や、英語とフランス語が常に求める論理性等である。最後に司会の小林先生が参加者の意見を求めたところ、中には、言語は文化を媒介するという点に関してあまりにも言語相対論的すぎるとか、果たして国による言語単位で文化を考えるのは妥当かどうか、などの意見もあげられた。

石井先生の話には、豊富な語彙と英語・日本語の活発なコードの切り替えなどが含まれ、まさに diglossia の中で文化が媒介されている空間であった。お話を聞きながら、時代の変化による新しい言葉の受容、言葉の柔軟な扱い、4つの文字システムを持つことによる表現の可能性など、日本語のスケールの大きさに改めて感動した次第である。会話をするときには、文字を意識する過程において、言語がその思考、カテゴリ、ニュアンス、ジェスチャーを通して文化を表すのである。日本語の高い受容性、表現の柔軟性、そして多様性は、我々が持とうとしている価値観でもあることに、ふと気づかされたように思う。

予定された一時間は、あっという間に過ぎてしまったが、先生は参加者に大きな充実感を与えて下さった。

#### 石井米雄奨励賞選考結果について

—第6回年次大会研究発表奨励賞は落合知子氏に—

研究発表奨励賞審査委員会

当学会設立時に会長であり現学会顧問の石井米雄氏から学会に寄付された通称「石井ファンド」(100万円)運用の一環として第5回年次大会から設けられた研究発表奨励賞は、兵庫県立大学で開催された第6回大会でも実施されました。研究発表者を対象として募集した結果、計10名の応募がありました。大会終了後審査委員会が開かれ、申請書、研究発表抄録、そして研究発表等に基づき、慎重審議の結果、落合知子氏(神戸大学大学院)が選出され、11月に賞状と奨励金(20,000円)が本人に送られました。同氏の発表題目は「バイカルチュラル育成のレディネスに関する研究—ニューカマーの子どもたちによる表現活動支援から—」でした。来年度においても当奨励制度を実施する予定ですので、会員諸氏は奮ってご応募下さい。尚、今後、受賞経験者、複数者での発表は対象外とすることが審査委員会で決められましたのでご留意願います。

文責: 久米昭元 (立教大学)

#### 2007年度年次大会の懇親会に参加して

朴 仁哲 (北海道大学大学院)

大会初日に行われたパネルディスカッションの終了後、校内の Byall : ビオールにて懇親会が開かれました。懇親会の前に、まず大ホールで在日韓国人の朴元さんによる韓国舞踊の披露がありました。韓国の伝統民族服装に包まれた朴元さんは格好よかったです。韓国の代

表的な打楽器チャンゴを緩急自由自在に操る多彩な技法に魅了されたのは私だけではないでしょう。韓国舞踊の終了後、会場の皆さんから朴元さんに大きな拍手が送られました。その後、懇親会場に移りました。まず久米会長より「多文化関係学会を楽しくやってみましょう」という気合が入った挨拶のお言葉を頂き、その後、石井敏先生より「多文化関係学会の一層の発展を祈願して乾杯したいと思います」という祝福のお言葉を頂いて、懇親会が正式に始まりました。懇親会が進む中、大会委員長の松田先生よりユーモラスな口調で、来場された諸先生方および本大会の運営に携わったスタッフの方々が紹介され、懇親会は盛り上がりました。

参加者の皆さんの多くは、ほとんど1年ぶりの再会だったと思いますが、時間的な隔たりはほとんど感じられず、会場では終始和気あいあいとした雰囲気になりました。懇親会でたくさんの方とお話ができ、たいへん嬉しかったです。また、何人かの先生方には私自身の研究内容も紹介でき、貴重なアドバイスも頂きました。楽しく充実した懇親会だったと思います。



パネルディスカッションで発表された李氏(左)と歓談する会員諸氏

## 地区研究会報告



### ■北海道・東北地区研究会

日時：2007年7月14日（土）

場所：藤女子大学 北16条キャンパス

#### 第1部「SKYの活動を通して多文化の共生を考える」

話題提供者：(財)札幌国際プラザ外国語ボランティアネットワーク 多文化共生グループ SKY

SKYは平成16年3月に発足したボランティアグループである。主に札幌市在住の留学生たちとその家族を対象にした支援活動を行っているが、活動の基層に横たわる理念は偏見や固定概念にとらわれない関係構築と正しい文化理解であるという。丁寧なアンケートやヒアリング調査を踏まえたきめ細やかな支援は、こうした理念が具現化したものであろう。留学生の生活にかかわる障害要因を具体的に把握することで、ゴミ出しのルールや防災などの生活上のスキルが正確に、また効率的に伝達されているという印象を持った。さらに、市民との交流促進活動として、毎年「オープンセミナー」を開催しており、今年は50名以上の参加者が集う盛会になったという。こうした企画を通じて市民は異文化理解を深め、そして留学生は狭くなりがちな対日本人ネットワークを拡大していくものと思われる。対話を通じたSKYの支援活動は、留学生たちの異国ニッポンにおける初期段階の不安軽減にもおおいにつながっていると思えた。

また、有志によるボランティア組織ゆえの運営上の課題やグループ構成員のジェンダー問題の他、言葉の壁による留学生の家族支援の課題も報告された。しかし、研究会の後、今後SKYの





活動に参加して、大学で学んでいる中国語や韓国語を役立てたいと話していた学生が数名おり、こうした形を含めて大学組織等との連携プレイが実現できれば、SKYの札幌における留学生支援はさらに充実していくのではないかと思われた。

文責：伊藤明美（藤女子大学）

## 第2部「アイヌの異文化受容について」

話題提供者：北海学園大学 藤村和久氏

第2部では北海学園大学教授藤村和久氏が「アイヌの異文化受容について」というタイトルで講演を行った。藤村氏は長年にわたる研究およびアイヌ民族との交流から、アイヌの考え方について主として和人と対比から論じた。まず、アイヌの空間世界は和人のように国家や社会といった概念に縛られておらず、「遠大」であることを説いた。また、そのような遠大な空間認識を持った彼らは他者や和人を「異文化」として捉えることもなく、そのため他者と敵対するということが無かったことを指摘した。かつて自給自足を基本としたアイヌの生活では、自分たちとは異なった存在である他者や自然を容認する、すなわち異文化を受容し、共生するすべを学ぶことで成立していたのだという。まとめとして、他者との違いを個性と考え、相手を認めるというアイヌの考え方は、差別やいじめが横行する現代社会に住む多くの人々にとって有用なものであることを指摘し、講演を終えた。講演後にも異文化との共生についての具体的な実践例など、多くの質問が寄せられ、活発な質疑応答セッションとなった。多文化共生を考える際にも、こうしたアイヌ民族の思想に学ぶべきことは多く、アイヌ文化振興法施行後10年という節目の年に実に相応しい講演内容であった。

文責：長谷川典子（北星学園大学）

## ■関東地区研究会

日時：2007年7月21日（土）

場所：慶應義塾大学三田キャンパス

テーマ：ベトナム文化を考える・語る

### 第1部「ハノイの路地のエスノグラフィー：動きながら関わりながら識る異文化の生活世界」

話題提供者：茨城大学 伊藤哲司氏

伊藤氏は、1998年ベトナム在外研究中のフィールドワークについて、路地風景の写真や、図などを多用し、親しみやすい語り口で参加者を心地よく引き込む発表をされた。

講演は、家を借り住み始めた路地が、通行のためだけでなく、人々の生活の魅力的な場であることの発見から始まった。「言葉の壁」は、それをものともしない当時2才の娘さんが、斜向かいの雑貨屋に出入りして強力な研究媒介者となったことで緩和されたという。

氏は、こうしてベトナム人の日常に自然とかかわりを持ち、最後には、日本語・ベトナム語でエスノグラフィーを出版されたのである。外国人から見たハノイの路地を描いたその本は、現地の人たちの関心をも大いに集めたとのことであった。



異文化を「動きながら関わりながら識る」ことをご自身が実践され、その重要性を何度も強調された。「客観的に観察をする」研究に対し、フィールドの人たちと積極的に関わり、そして交わることを、半ば楽しみつつ、そこで識りうることを大事にしていく氏の研究姿勢が、鮮明に実感された時間であった。

私の幼稚園教諭としての 20 年の間には、国外から来日し、母語とは違う環境で園生活を始める子どももいた。初日、身動きもせず周りの様子を見ていて「泣き出してしまうかな？」と心配するのだが、たいてい、しばらくすると好きな遊具を見つけ、うなずいたりまねたりし、遊び仲間に加わり始めるのである。「言葉の壁」を越えて遊ぶ子どもたちのパワーに驚かされることは多い。こうした私の経験と重ね合わせると、多様な文化の中で動き、また、関わることは大切であるということに改めて感じた次第である。また、将来子どもたちが様々な人々と共生できる基盤をもてるよう、多文化を体験する保育の工夫をしていきたいと感じた研究会であった。

文責：高橋順子（東京都千代田区立九段幼稚園）

## 第 2 部「ヴェトナム人の多文化接触：メンタルヘルス概念と女性の通過儀礼の変容」

話題提供者：武蔵野大学人間社会・文化研究科博士課程後期 2 年生 鵜川 晃氏

鵜川氏は、ご自身がかかわられた近年の二つの調査、1. ヴェトナム人女性の妊娠・出産・産褥期に見られる通過儀礼がヴェトナムとの比較で、移住先の日本とカナダでどう変容したのか、そして、2. これら三国におけるアルコール依存、うつ、統合失調症についての原因帰属をめぐるメンタルヘルス概念と、援助探索行動とにどんな違いがみられるのかを丁寧かつ明快に発表された。最後に、病気の概念や援助探索行動における文化変容として、表面的な変化や適応、また家族による違いにかかわらず、さまざまな慣習の中に自文化が伝承されているのではないかと、例えるとキャベツのように普遍的な部分（芯）と、少しずつ移住先の文化に影響を受け変容をみせる部分（葉っぱ）があるのではという考えを示された。インドネシア難民という言葉が何を指し、それは日本でしか使われていないという事実、日本の難民受け入れ政策の変化、ヴェトナム人、ラオス人等、日本における民族的マイノリティにあたる人々が日本で暮らしをたて、その過程で生じる適応の問題に、氏やその多文化精神医学の研究グループが、彼らの文化に沿う形でのメンタル・ヘルスの支援を模索しているという、多文化社会化しつつある日本の、現実と課題の一端が明らかにされた。質疑応答では、言葉や文化の壁を越えて調査する若い研究者の方法論や思索の刺激になる多数の質問が、学会内外の参加者から寄せられ、活発なやり取りが展開された。聞き取り調査で文化葛藤などでの苦労の際に、メールや愚痴日記は書いたが、フィールドノーツをつけてなかったのが、今後してみたいといったことまで、和やかに話される研究会であった。

文責：手塚千鶴子（慶應義塾大学）

## ■関西地区研究会報告

日時：2007 年 7 月 7 日（土）

場所：関西学院大学 大阪梅田キャンパス



## 第1部「異文化から多文化へ ―日本における『外国人とのコミュニケーション』のイメージと実態―」

話題提供者：近畿大学 Teja Ostheider [テージャ・オストハイダー] 氏

発表は学生を対象とした意識調査のデータから始まった。「日本における外国人のなかで、どこの国の人が多いと思いますか？」(三位までの国名を回答させた)この間に対する回答の一位は韓国・朝鮮、二位中国、三位アメリカ合衆国であった。実際にはわずか 2.5%しかいないアメリカ合衆国からの人々のイメージは、15%にも上るブラジル人や 9.3%のフィリピン人のイメージよりも「多い」ことが示された。日本における「外国人とのコミュニケーション」について、そのイメージと実態のギャップが問題として強調された。日本で言われている「異文化コミュニケーション」=英会話、「英語第二公用語論」、「英語が使える日本人」などのスローガンが出てくる現在の日本社会のかかえる問題点を指摘したうえで、オストハイダー氏がこれまで実施した調査データを基に、外国人と話すときに使用する言語、外国人の日本語能力に関する経験、「外国人」の象徴となりがちな西洋人に対する日本人の意識、日本語のイメージなどから一定の傾向を指摘された。

発表の後半では、外国人に対するコミュニケーション行動を左右する要因に、単に外国人の言語能力だけではなく、出身地による外見的特徴、また非外国人の経験、態度、先入観や言語意識などのような「言語外的条件」が大きく関わっていることを指摘された。つまり、物理的また心理的な「言語外的条件」と対外国人言語行動が深いかかわりがあること、それが日本人の「過剰適応」として現れていることを調査結果から示された。その中で特に問題にされたのが「第三者返答」である。つまり、日本人は話し相手であるはずの外国人に返答するのではなく、その場にいるが本来は第三者である日本人に返答する傾向があるというものであった。

最後に氏は、異文化から多文化への展望として、外国人の出身国を問わず公平にコミュニケーションをはかれるような能力を身につけることが重要であること、また外国人に対して使える英語能力よりも、日本語による対外国人コミュニケーション能力の育成が重要であることを指摘された。そのあとの懇談では、日本におけるコミュニケーション教育の問題やその解決策についても積極的な意見が交わされた。今後のわれわれの課題として共有していることが確認された。

文責：中川慎二（関西学院大学）

## 第2部「中国人と付き合う ―大学交流の現場から見ると―」

話題提供者：桃山学院大学 三宅 亨氏

三宅氏は、中国人との付き合いについて、歴史的なアプローチから分析をされた。1980 年以来、外国教育と国際交流に携わり、20 カ国あまりの大学との交流、留学生の派遣や受け入れに関わってこられた豊富な体験からの具体例をあげて、ユーモアをまじえながら非常にわかりやすく説明された。

中国の歴史を振り返ると、始皇帝から共産党独裁体制に至るまで、民意による政権は一度も存

在していない。乱世・革命の繰り返しで庶民の生活や安全はほとんど顧みられなかった。国家・政府・支配者は庶民の生活を守らない「大統一」という中央集権のもと、庶民は、政治に関わることを避け、自衛策として、他人を安易に信用せず、自分の身は自分で守る、集団よりは自己を優先する「一盤散砂」という個人主義という生き方を身につけてきた。一方、生き残るために、血縁や親しい友人とは助けあう、「多個朋友」「拉関係」「走后門」という人間関係を大切にしてきた。赤の他人と、血縁や地縁で結びついた身内の間に、厚い壁を築いてきた。原理主義と現実主義という両面を兼ね備えている。中国人との人間関係において、何よりも大切とものとされる「面子」は、表としての原理主義で、一旦「面子」(原理) がたてば、裏としての現実主義で対応するという柔軟性も持ち合わせている。「中国人と付き合う」場合、「まずは本音で語り合える友人関係を作りあげること」が大切である。その時には、何よりも相手の「面子」に注意することを強調された。

今後ますます必要性が高まるとされる中国人との付き合いにおいて、今回の発表では一つの枠組みが提示された。三宅氏は「相手の文化・歴史を尊重すること」「優劣をつけず文化の違いを楽しむこと」を結びとされたが、多文化間の関係性を考える際に、忘れてはならない大切な言葉をいただいたように思う。

文責：柳本麻美（桃山学院大学）

## ■九州地区研究会報告

日時：2007年9月29日（土）

場所：九州大学 六本松地区キャンパス

---

今回は九州地区で2回目の研究会だったが、わざわざ山口や長崎から駆けつけてくださった会員の参加もあり、賑やかな会合となった。発表のテーマ・分野は、全く異なっていたが、参加者たちはそれぞれの発表に真剣に耳を傾けて、研究の方法や概念・用語の使用について質問を投げかけていた。学ぶことの多い充実した研究会となったが、惜しむらくは2次会の参加者が少なかったことである。

第1部「異文化間における対人関係価値志向性の多角的分析 ―滞日留学生と日本人学生の人間関係の改善に向けて―」

話題提供者：山口大学国際センター J-cat 研究室 谷之口博美氏

本研究は日本に滞在する留学生と日本人学生との間で友人形成が難しいという現実を踏まえ、それがお互いの価値観の違いによるものだと仮定し、その相違を明らかにする「対人関係価値尺度」を作成し、調査を行ったものである。発表は先行研究の説明に時間がとられ、留学生問題や価値観についてのこれまでの研究について丁寧に説明された。しかし、その後調査の結果に飛んでしまい、後の質疑応答では「プロセスが分かりにくい」という批判も出ていた。

調査の結果からは、日本人の対人関係価値志向である「傍系＝直系＞個人」の、特に「傍系＝直系」という、二つの価値志向性が混在した複雑さを留学生が読み取ることが出来ていないことが明らかになった。さらに「日本人観」のみならず「自国での価値観」と「日本での行動」についても同項目で調査したところ、自国での価値観には二つの価値志向性が混在する「二価値混在



型」が存在し、しかも多数派を占めていたことがわかった。また、「単一価値志向型」よりも「二価値混在型」の方が日本人観に整合性が見られた。ここに両者の認識の差が示されたことになる。

今後はデータの数を増やし、検定をかけてみることによって各項目を特定してゆき、尺度作成にむけて研究を続けたいということであった。

文責：石松弘幸（福岡大学）

## 第2部「多文化社会論の課題としての帰属心」

話題提供者：福岡大学・福岡教育大学 石松弘幸氏

本発表では、チャールズ・テイラーやウィル・キムリカなどの多文化主義論とスーザン・メンダスの寛容論が紹介され、その意義と問題点について検討された。そして社会への帰属心という論点が今後の多文化社会論の理論的課題として提起された。テイラーやキムリカの行った多文化主義論の意義は、アイデンティティにとっての文化の重要性を指摘したこと、その尊厳の保証を試みたことにあるという。続いてスーザン・メンダスの寛容についての議論が検討された。メンダスは寛容の理念について JS ミルとジョン・ロックの議論を対比して考察し、ロックの社会統治のための合理性に立脚した寛容論を、自律を基調とするミルの自由論・寛容論より高く評価する。しかし、複数の文化が共存する今日の社会において、異文化・他者への寛容という理念そのものが、その内に寛容の対象となる他者＝よくない存在・様式という理解を含むゆえに、適切なものではない。また、上の多文化主義論者の議論についても、多文化社会全体への帰属心という課題の実現という点では不十分である。なぜなら、多文化主義的措置によって、個々の文化共同体内の帰属心が実現されたとしても、他の文化集団との間に反目が存在すれば、多文化の共存する社会全体への帰属心は達成されない可能性があるからだ。こうして、多文化社会において解決すべき問題としての社会全体への帰属心という論点が提起され、そのために必要な新たな理念の必要性について言及がなされた。

文責：谷之口博美（山口大学）

## 理事会議事録（抄録）



### ■2007年度第1回

日時：2007年6月17日（日）

場所：立教大学

出席者：（敬称略）青木、石井（敏）、石井（米雄）、磯崎、イングルスルード、抱井、金本、久保田、久米、河野、小松、清、田崎、手塚、灘光、林、松田、細川

オブザーバー：石垣、小林、坂井、梶谷、森山

### 【報告事項】

1. 2006年度多文化関係学会活動報告
2. 事務局より会計および会員状況

- ・ 現在の会員数は 261 名。学会費支払い率は 2004 年 84%、2005 年 69%、2006 年 57%、2007 年は現時点では 30%である。
- 3. 2007 年第 6 回年次大会の準備進捗状況
- 4. 「日本学術会議協力学術研究団体」への申請
  - ・ 申請書は灘光氏が既に作成し、小松事務局長が数日中に団体に申請書を送付予定である。
- 5. 前回の議事録確認

#### 【審議事項】

1. 2007 年度の大会開催（特に広報活動）について
  - ・ 抄録への広告掲載については業者（書店）に依頼中である。
  - ・ 総会では決算・予算案を審議する。
2. 今後のホームページの運営について
  - ・ HP の英語化が必要である。
3. 学会費支払い促進方法について
  - ・ 金額その他を明記した振込み票を同封したことで、かなりの効果があった。会員番号を封書に印字することを印刷会社に依頼中である。
4. 会員の拡大、獲得について
  - ・ 魅力ある学会にすること、会員増加に向けて戦略的に考える必要がある。
5. 学会の企画について（「ホラロジーの会」を含めて）
  - ・ ホラロジーのようなリラックスした議論の場がほしい。
6. 執筆要綱、投稿規定の修正・改定について
  - ・ 字数制限については、文献一覧も文字制限に含まれることを明記する。
  - ・ 以下の項目については、記述を削除する。
    - －第 9 条：“フロッピーディスクで送付”
    - －第 10 条：“発行日は毎年 10 月”
    - －第 15 条：“超過分の掲載料金 ... 10,000 円とする”
  - ・ 投稿規定を改訂した場合には、附則に全て改定日を記入する。
  - ・ 執筆規定について、脚注は将来的には全て文末脚注で統一する。
7. 2008 年度の大会開催地と開催校について
  - ・ 開催地は関東地区とし、開催校として、第 1 候補は明星大学、第 2 候補は立教大学（新座キャンパス）となった。開催時期は 10 月の第 3 週（18・19 日）または第 4 週（25 日・26 日）である。プレカンファレンスは、青山学院大学での開催も可能である。
8. 理事の役割分担について
  - ・ 企画委員長は抱井氏とする。
  - ・ 財務委員会委員については、小松氏以外に誰か 1 名を追加する。
  - ・ 学会誌編集委員会委員として、原和也氏が加わる。
  - ・ 関東地区研究会委員として、イングルスルード氏が加わる。
  - ・ 九州地区研究会委員長は松永氏、中国四国地区研究会委員長は細川氏とする。
9. その他
  - ・ ニュースレター、学会誌の残部は事務局にて一括管理する。
  - ・ 学会誌は図書館などの機関向けには 3150 円、その他には 2000 円とする。
  - ・ 企画は学会全体として取り組む必要があるので企画委員以外の人々も参加する。
  - ・ 次回の理事会は兵庫県立大学にて、10 月 26 日 18 時～20 時とする。

以上

#### ■2007 年度第 2 回

日時：2007 年 10 月 26 日

場所：兵庫県立大学

出席者：（敬称略）伊藤、抱井、金本、久保、久米、小松、田崎、手塚、松田

---

#### 【報告事項】

1. 前回議事録確認



## ■2007年度第2回関西地区研究会

3月に実施予定の地区研究会は、昨年度同様、SIETAR(異文化コミュニケーション学会)との共催でフィールドワークを計画しております。詳細につきましては、追って、HP等でご案内いたします。

問い合わせ先: 金本伊津子(平安女学院大学) [kanakana@ktd.biglobe.ne.jp](mailto:kanakana@ktd.biglobe.ne.jp)

## ■2007年度第2回九州地区研究会

日時: 2008年3月29日(土) 14:00-17:00

会場: 九州大学六本松地区キャンパス本館2F第3会議室(予定)

福岡市中央区六本松4丁目2-1

<http://www.kyushu-u.ac.jp/access/>

参加費: 無料。学会員以外の方もご参加をお待ちします。

研究会終了後、懇親会も予定しています(場所:引き続き同会議室にて。参加費¥1,000程度)。

申込方法:研究会・懇親会の参加申し込みは、前日までにメールか電話にてお願いします。

問い合わせ先: 松永典子(九州大学) [mnori@scs.kyushu-u.ac.jp](mailto:mnori@scs.kyushu-u.ac.jp) (092-726-4720)

話題提供(1): 古谷 真希氏(九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程2年)

トピック: 「海外で働く日本人日本語教師の文化的調整のプロセス(仮題) —教育現場における異文化接触の事例を中心に—」

話題提供(2): 畠山 均氏(長崎純心大学人間心理学科)

トピック: 「『日常会話』とは何か? —異文化コミュニケーションの視点から」

## お知らせ



### ■メーリングリストの運用について(ウェブ管理委員会)

2007年9月末よりメーリングリスト([mail@js-mr.org](mailto:mail@js-mr.org))がスタートしました。メーリングリストは、スパムメール対策等の安全性確保のために設置し、研究会や大会等の案内に活用させていただいています。なお、注意点を以下にまとめましたので、ご留意いただきたくよろしくお願いいたします。

- 一般会員の方は原則として投稿はできませんが、希望される場合は管理者へ連絡願います。理事会で承認され次第当該会員へその旨通知いたします。 管理者 → [mail-admin@js-mr.org](mailto:mail-admin@js-mr.org)
- 登録メールアドレスの変更は、多文化関係学会専用サイトで修正をした上で、管理者へ連絡して下さい。 管理者 → [mail-admin@js-mr.org](mailto:mail-admin@js-mr.org)
- 届いたメーリングリストに返信すると、送信者ではなく、メールを登録している会員全員(メーリングリスト)に返信されますので、返信する際はご注意ください。

### ■学会誌について(学会誌編集委員会)

編集委員会から報告いたします。審査・編集作業の関係で、『多文化関係学』第4巻の発行が遅れていることをまずお詫び申し上げます。今号に向けては、論文14編、研究ノート2編の応募がありました。厳



格なブラインドレビューの結果、論文 7 偏、研究ノート 1 編が採択されました。現在は発行に向けた最終チェックを行っているところです。2 月には今号をみなさまにお届けできると思います。

#### ■事務局より

・ 昨年 9 月 20 日付けで「多文化関係学会」は「日本学術会議」の「協力学術研究団体」として認可されその称号を受けました！

【「日本学術会議」は内閣総理大臣所轄の82万人の日本の科学者を内外に代表する独立の機関。210人の会員と約 2000 人の連携会員によって職務を執行】この称号の取得により、当学会は「日本学術会議」と緊密な協力関係を持ちその活動に協力します。学会誌への掲載論文は公的に認められます。

・ 学会誌の大学図書館への販売、丸善と最終契約へ

大手書籍販売の丸善によって、いよいよ学会誌(ジャーナル)の販売が可能となります。予定では3~4月頃から本学会ジャーナルの大学図書館への販売が全国展開となります。学会員のみなさまも、勤務先大学図書館等による購入にご協力をお願いします。学会誌の販売は、学会の財政基盤強化と社会的認知に大きく貢献することとなります。問合せは事務局まで。[komatsu@ngu.ac.jp](mailto:komatsu@ngu.ac.jp)

・ 昨年度、第 6 回年次大会の抄録残部があります！

昨年度、第6回年次大会は、大会委員長の松田先生(学会副会長)チームの奮闘により、大きな成功を収めました。また大会運営資金も円滑に準備いただきました。現在、大会抄録の在庫がありますので、入手希望の方は事務局へご連絡ください。(要 500 円切手)[komatsu@ngu.ac.jp](mailto:komatsu@ngu.ac.jp)

・ 学会・会費納入のお願い

みなさまのご協力によって、学会は順調に運営されていますが、財政状態は依然として厳しさに直面しています。今後の諸活動の円滑な運営とさらなる発展のため、まだお済みでない方は、ぜひとも会費納入を[昨年度、本年度をチェックして]お願い申し上げます。尚、郵便局の振込み用紙には、次のことを明記ください。

① 氏名、住所、学会員番号、正会員(8000 円)か学生会員(4000 円)か、

② 学会の加入者名は、「多文化関係学会」で口座番号は「00120-2-536126」です。

・ 学会活動参加の手引きお知らせ

諸活動についての情報は、すべて学会ホームページ(HP)[www.js-mr.org](http://www.js-mr.org)に掲載されています。

### 2008 年度年次大会のお知らせ

第7回多文化関係学会年次大会は、明星大学で 2008 年10月18-19日の両日開催されます。発表募集のご案内等、詳細は追ってお知らせします。今回は東京での開催となります。多数の皆様のご参加をお待ちしています。

### 編集後記

NL 第 12 号をお届けします。今回は昨年兵庫県立大学で開催されました年次大会特集です。参加できなかった会員の皆さまには大会の熱気を体感していただければ幸いです。この新しい一年が会員の皆さまにとりまして実りある年でありますよう、心からお祈りいたします。

(NL 委員会：伊藤明美・生越秀子・徳井厚子)